教職大学院での学びを振り返って
～学びは、ボディーブローのように効いてくる～

古川　覚
（学校経営力高度化コース第６期生）

１．はじめに

2013 年 4 月、京都府現職教育職員長期研修として、わたしは十数年ぶりに本学に足を踏み入れた。十数年前は、情報教育というわたしが得意とする分野での研修であり、期間も半年であったため、研修がしんどかったというイメージをほとんど持っていなかった。

だから、今回の研修においても、難しいことを学ぶという不安より、じっくり時間をかけて新しいことを学べるという期待のほうが大きかった。しかし、そんな期待は１ヶ月も経たないうちに消えてしまっていた。

２．不安と挫折の中で

「学校経営の自律性確立」「学校の組織マネジメント」「スクールリーダーの育成」「教育の今日的課題」これらは、授業で何度も出てきたことばである。そして、先生方が口をそろえたように言われるのが、「そう考える根拠は何か」「もっとクリティカルにみないと…」「ミドルの役割とは何か」「現場（学校）のことは忘れて」など、わたしが今まで深く考えたことがなかったことであった。

意見を求められても、自信を持って答えられるはずもなく、さらに、他の現職研修生が当たり前のように答えるのを目の当たりにするに付け、今までの自分はなんだったのかと思い落ち込んだ。今まで積み上げてきた自信が音を立てて崩れていった瞬間であった。

少なくとも前期はそんな気持ちを抱えた、ドロップアウトしそうになる自分を鼓舞しながら、何とか持ち堪えることができた。

ここ教職大学院では、人間教師の育成が謳われているが、それは、人の気持ち、痛みが分かる教師を育てることなのだと思う。人の気持ちや痛みが分かるには、教師自身が挫折を味わったことのある人の方が、そうでない人よりもより理解できるのではないだろうか。

わたし自身、そんな人間教師に少しは近づけたかなぁと感じている。

３．さまざまなつながりの中で

授業の中でフィールド・ワークが用意されていたが、これまで京都府の学校を訪問したことはあっても、京都市の学校をほとんど知らないわたしにとって、これは、とても興味深い活動であった。しかも、ほとんどが学部卒院生といっしょに取り組んだので、彼らの知識に驚かされると同時に、教育に対する考えの甘さも感じるようになった。このことは、研修を通して若手教員を育成するという修論のテーマ

にもつながった。

また、2. で述べたように、わたしはこの１年間で幾度となく挫折を味わった。それでも立ち直ることができたのは、現職の同志がいたからに他ならない。この一期一会のつながりは、ここで得た大きな財産となった。

４．１年間の学びを振り返って

昨年４月に出された「第２期教育振興基本計画（答申）」の前文に、「今正に我が国に求められているもの、それは、『自立・協働・創造に向けた一人一人の主体的な学び』である。」と記されている。この１年間の学びこそが、まさに、「自立・協働・創造」に向けた学びであったように思う。

研修を通して、特に大事だと感じたことは、ものごとを単に知識として取り入れるのではなく、自ら思考をめぐらせ、そのことをクリティカル（批判的）に見るということである。それは、物事を批判的に見ようとすれば、自ずとそのものの本質と向き合うことになり、結果として賛同し、同様のことを述べたとしても、そこにはしっかり自身の意見が根付いているのではないかと考えるからである。このこと一つを取り上げても、教職大学院での学びは、わたしにとって有意義なものであったと言える。そして、たくさんの刺激を受けた場であった

５．おわりに

１年間の学びを終え、わたしは、研修前の現場に戻ってきた。復帰当初は、次から次へと出てくる報告書や調査に追い回され、大学院での学びのことなどすっかり忘れてしまっていた。時折、思い出したとしても、「去年の今頃は、もっとのんびりしていたのに。」「1 年前に戻りたい。」など、後ろ向きなことばかり考えていた。

しかし、１ヶ月が過ぎ、少し自身のことを冷静に振り返ることができるようになって気づいたことが三つある。

一つ目は、組織の中での立ち位置を考えて行動している自分がいること。

二つ目は、危機管理意識を強く持つ自分がいること。

三つ目は、わたしが行った（または、行おうとしている）ことについて、根拠を明らかにし、自信を持って対応している自分がいること。

である。大学院で学んでいるときには、「こんなこと現場で通用するのか？」「所詮、机上の空論ではないのか？」など、大それたことを考えていた自分が恥ずかしい。まさに、井の中の蛙であったと思う。

今になって、ようやく大学院での学びが現場のことと結びついてきたような気がする。まるで、ボディーブローのように…。

だからこそ、若手教員の育成、校内研修の活性化など、わたしが研究課題として取り組んできたことを理想として終わらせるのでなく、実現に向け精進していこうと改めて決意し、明日の現場に向かっている。

（精華町立精北小学校教諭）